雪舟と大分県

立川輝信

目次

序にかえて
一、雪舟府内在住についての立証
1、天開図画楼記
A、府内　B、山口
2、雪舟作鎮田瀑
3、雪舟の遺跡
二、雪舟豊後移住の理由
三、天開図画楼の景観とその所在地
四、雪舟豊府（大分）在住当時の生活
五、雪舟豊府在住の期間
六、雪舟の二豊遺跡附両筑の足跡
七、天開図画楼趾に就いての郷土人の関心
八、大友氏と天開図画楼
九、宝戒寺境内雪舟記念碑
十、雪舟画鎮田瀑と現況
十一、昔の沈堕の滝の景観
十二、雪舟の遺墨・遺品と二豊
十三、雪舟と仮山
十四、良心と雪舟
十五、桂庵玄樹と万寿寺
十六、了庵桂悟と雪舟
十七、雪舟の門人と郷土
十八、雪舟の署名鑑定上より見たる鎮田瀑
十九、雪舟の山水小巻と豊後日出藩主木下俊長
あとがき　引用と参考文献

序にかえて

昨一九五五年秋、世界平和評議会は、一九五六年度の「文化の発展のために貢献した世界的な偉人」を十人選んだが、その中の一人に、日本人として始めて雪舟が選ばれた。このため世人に雪舟が再認識され、雪舟に対する評価も一層世界的となり、我国でも「雪舟四百五十年記念会」が、美術界・学界・文化界の広汎なる人々の協力によつて結成され、既に去る四・五月には東京上野の国立博物館で雪舟展が開催されたのを始め、国内各地は勿論、国外でも各種の記念行事が盛大に行われている。

由縁の地我が大分に於ても私共の大分県地方史研究会と大分県美術協会大分県観光協会が共に後援して、雪舟作品の原寸大写真と、県下に伝承されている雪舟ゆかりの地の現況写真展を、毎日新聞主催の下に、十一月二十日より三日間、大分市トキハデパートで開催された。私がかねて関心を持つて、いささか研究していた雪舟と大分県関係の旧稿も、昨年三月拙宅の祝融で灰となつていたので、この機会に筆を起し稿を新たにして敢えて各位の御批正を仰ぐこととした。

一、雪舟の府内在住についての立証

1　天開図画楼記①

画聖雪舟の大分在住を確認し、これを証明しているものは先づ次ぎの二つの天開図画楼記（府内関係及び山口関係のもの）を挙げなければならない。即ち

A・天開図画楼記（府内）

画師、楊公雪舟、勝地を豊府②西北の隅に相し、一小楼を瓶作し、榜に題して天開図画と曰ふ。滄海前に接し、群峯後に連り、孤城左に聳え、二水右に流れ、位置勢排、千変萬態なり。天即ち神品を留め、以て此の境を開張するにあらずして何ぞや。顧ふに其の楼上景致を以つてして、此を公の筆跡に擬すれは、則ち大山の丘垤に於けるの類なり。筆跡、甚、高くして景致弥ゝ低し。何ぞ其れ然るか。公嘗て南遊し、余、亦、同舟す。天下の名山大川を歴覧し都邑の雄富、州府の盛麗、九夷八蛮、弁服鏞衣、異形奇状の物、一々模写して、以つてこれを手に得て、而して心に応ず。則ち其の画意潤くして大なるもの言はずして知るべし。翅に衆体を兼備するのみならず、看画臨模、咄々真に逼らざるはなきなり。道釈人物は唐の呉道玄、宋の梁楷子に依拠し、山水樹石は或は馬遠に出で、或は夏珪に入り、水墨淋漓自然に雅趣あるものは西湖の僧若芬の流なり。雪山を掃出して人の耳目を驚動するものは、西域画者の孫、高彦敬の亜なり。水禽山獣は則ち長沙の易元吉に斉し、花鳥著色は則ち雪溪の銭舜挙に類し、龍虎・蘆雁・白鷺は粗ゝ法常を学び、その麤惡を師とせず。墨鬼鍾馗等は頗る龔翠岩の怪に及ぶ。向者大明国北京礼部院中堂の壁に、尚書姚公、公に命じてこれを畫かしめて曰く。方今、外蕃、訳を重ねて入貢するもの、殆んど三十余国に至る。未だ公の画く所の如きを見ず。況んや、又、本部科挙の事を司る、

則ち中朝の名士斯堂に昇らざるものなし。是の時に及んで諸生を召して壁上を指して必ず言はく。是れ乃ち日本上人楊雪舟の墨妙なり。外夷にして猶斯の絶手あり。二三子何ぞ各〻汝の業を勤めて、以つて斯域に到らざるかと。方さに大邦に於いて賞嘆を加へらるゝ此のごときなり。是に繇りて之を論ずれば、我朝当代の絶芸、何人か其の右に出づるを得んや、倘し宣和・紹興の間に生れて、院人の中にありと雖も、其の名を称せらるゝや是に於いて決せり。故に上、公侯貴介より、下、浮屠民・工商の徒に至るまで、数点の残墨を求めんと欲して、而して来往踵を接し、鉄門限を以つて称せらる、亦、豈、誣ふべけんや。戸に入りて其の席次を窺ひ見るに、粉本・画筆・左右に雑遝し、幅の大なるもの、幅の小なるもの、絹の細なるもの、紙の素なるもの、既に畫き出したるもの、未だ畫き出さゞるもの、卷起して棟に充ち、装潢して壁に掛け、斯の如くして則ち粉を呪ひ日を終へ、丹を研いて月に渉る。志倦み神疲るゝの時、欄に凭りて一拍し、襟を抜いて風に当り、屢々蘇息して肺を寒げ、以つて意を繪事に寓す。然れば則ち楼は其れ天に仮りて以つて斯の画本を開き、公は其れ楼に仮りて以つて斯の画趣を長ぜしむ。則ち向の大山丘垤の喩へ、理に於いて相違戻するに似たり。嘗く明哲の君子を待つて、これが優劣を論ずるものか。若かず卷きてこれを天に帰せんには。而して斯篇の銘完固にして不朽に垂れん。仍つて公の画家の系を案ずるに、如拙翁の的孫にして、而して謂はゆる徳元文公の真子なり。青は藍より出でゝ而して藍より青しとは斯の人の謂ひか、余の非言僭作の記、恐らくは後の誚を招かん。慙汗赧面、謹んで記す。

文明丙申三月初三日　　杏塢呆夫良心誌焉

B・天開図画楼記（山口）

四明天童首座雲谷老人、諱は等楊、雪舟と号す。本貫は備の中州の人、姓は藤氏、蚤く洛の万年に隸し、春林大和尚に師承す。天資淳謹、而して揮洒に工みなり。親ら能画師文公の左券を佩び、成化四年大明に入り、名家の筆法を歴試す。名山大川遊ぶこと殆ど四方に遍し、三相を更へ、而して本朝に帰り、豊の後州に寓す。其の居る所の宇、榜して天開図画楼と曰ふ。亦、博からずや。人、皆、筆端に三昧遊戯の妙あるを知るのみ。爾後、防城の郡府に来り、地をトして新たにこれを築く。これを望むに村塢のごとく然

り。岩石の幽邃、流泉の縈廻跬歩の際、城市と胥ひ霄壤せり。亦、天開図画を以て小闊北牖に顔す。戸を開て朝暉夕陰を見る。乍ら雲、乍ち霧、煙霏嵐靄、風雨晦冥、雪月皓潔、仰観俯察、前に相代り斯須に変態す。豈、啻に千万のみならんや。而して人、未だ天開図畫の妙此に在らずして彼にあるを識らざるなり。夫れ天開は天地開闢其の始を為すなり。春秋四時、竝に図を彰はすと云はんが如し。天地日月山川草木共に定位をなす。画、豈に然らんや。五彩布畫、万物森羅、況んや水墨活法、東塗西抹、筆に随つて発揮し、神工天造、測る可からず。予、素と繪事に昧し、客遊閑暇、屢々雲谷関を扣く。従容徐暢、海外異域、討論商榷昨、一禎子を寄す。乃ち天開図画楼記なり。洛東釈杏林公文以つて之を題す。披いて而してこれを読む。夫の古今画学の殊致家法を詳にするに、伝の見るべきあり。唐宋元明、帝王名臣、碩儒道釈、品彙著明、老人、豊にあるの日施設する所なり。若し是れ雲谷地を易ふれば皆然り。胡ぞ予に請うて源流を疏述せん。姑くこれを雲谷老人に質す。威音以前空刼那畔物々本然人々固有す。言を天開に仮り、以つて時人に示さん耶。其の図画は百億の蘇迷盧以つて一毫芒と為す。無辺の香水海涵して一泓滴を作し、虚空際を画く、譬へば一片の紙素のために微塵の点数削りて圭水を作し、終日、觚を秉り未だ嘗て潤色せず。汚染陳年、磨墨未だ嘗て磷細せず。是れ故に雲谷の歯、古稀に垂んとし、乾坤の間に蠖屈し、寂寞の隈に燕居す。「此に棲む」（衍文カ）是れ雑花筵中善財南詢五十三不請の親友に遇着せずして、未だ慈氏の一弾指に上らず。須らく之を門外に入るゝことを得んや。然らば則ち雲谷大休歇の場に罷参す。豈、凡少の得て窺ふ所ならんや。雲谷乃今、居る所の扁は、南遊の日、朱夫子の仰本を獲て十襲して還り、仍りて之を命ず。地は褊少と雖も、域は清商と称す。是に由つて賢大守時々此に周旋し、此に逍遙し、野客官僚好事の儔、踵を接して至る。老人竹椅蒲園、侶の為めに地を掃ひ香を装ひ課となし、花を採り水を汲む。水の清きものこれが激となれば則ち鳴り、石の巨いなるものこれが崖立となれば則ち聳ゆ。異卉奇葩妍を窮め美を逞うし、珍禽怪獸、隠顕蜚鳴、錦鱗游泳、粉翅聯翻、或は朱夏青晝涼を納れ、主賓唱酬、風月往来、皆是れ天開図画楼の後記となし、漫りに壁陰に書す。

前洛東慧峯無価主人了菴桂悟

即ち大分の畫楼を訪ねた呆夫良心は、その訪問記たる天開図画楼記の劈頭に於いて、「画師、楊公雪舟、勝地を豊府西北の隅に相し、一小楼を搬作し、榜に題して天開図画と曰ふ」と、豊府即ち我が府内を確認して書いてある。又、後に移り住んだ山口の天開図画楼後記を書いた子蕃桂諸は、その本文中に「而して本朝に帰り、豊の後州に寓す。其の居る所の宇、榜して天開図画楼と曰ふ」と、又、「老人豊にあるの日施設する所なり」と、豊後在住を明記してある。今更蛇足を添ゆる迄もなく、この両天開図画楼記によつて雪舟の府内在住は疑う余地はない訳である。

2. 雪舟作「鎮田瀑」③

角川写真文庫「雪舟」中に收載されてある水四四図の鎮田の瀑の説明に次の如く書いてある。

「鎮田瀑布図」は大分県の沈堕の滝の実景を描いたもので、一四六七年五十七歳のころの製作になると思われます、当時彼は豊後に住んでいたからです。この絵は一九三三年の関東大震災で焼失しました。」と。

其の他の本図にふれた新旧の文献は皆雪舟がその実景を描いたものであると認めてある。これによつて雪舟の豊後在住を立証する一資料となると思う。

3. 雪舟の遺蹟

必らずしも確実と断定は出来ないが、雪舟の足跡を印した地と伝承する処が後に記す如く県下各地に所在する。伝説は歴史の母であるとも云われる。傍証の資となるのではあるまいか。

以上の理由により雪舟の大分在住は間違いないと断定出来ると思う。

註① 両天開図画楼記共原文は漢文であるが、読解上書き下しの此文を「画聖雪舟」より転載した。

② 豊府は当時の府内を指し、今の元町より坊ケ小路辺に至る大分川に沿ふた街である。明治二十二年三月二日、町村制施行に付町村区域名称を改定した際、現大分市内である、当時の古国府村・上野村・羽屋村・畑中村・豊饒村を合して豊府村と称した時代がある。

③ 鎮田は現在は沈堕と書く。

二、雪舟豊後移住の理由

雪舟が帰朝した時は国内は応仁の乱で暗黒の真中、都の彼の旧寓相国寺も煙となり、両党の争いは地方にまで及んだ。①そのため帰朝直後の雪舟の動静は不明であるが、先に終生の

ため盧を結んだ山口の雲谷も、政弘（大内）は上洛し、留守の守護代陶弘護と、幕府に通じた政弘の叔父、大内教幸との対戯によつて、安住の地でなかつたことは明らかである。[2]そこで雪舟が豊後に移住して居を定めたのであるがそれに就いて次の四つの理由があると思う。[3]その

第一は、豊後には禅宗が早くから行われていたことである。[4]即ち国主大友氏は鎌倉時代の初めから、代々九州の名族で、徳治以降、大友氏の外護を受けた豊後万寿寺では、大友四代貞親に招かれて、博多承天寺より錫を豊後に移した東福寺聖一門下の直翁智侃が開山才一祖となつて、常住の衆僧一百余員を擁して盛んに禅要を呈示し、後世に門葉六十余箇寺を分出した基礎を確立し、その門下自闡正総は、延慶二年大友六代氏泰の外護によつて、実際寺を東郡西安岐に[5]剏め悟菴智徹も亦田原直平の外護によつて、古刹清水寺を改めて宝陀寺として西郡田原に興し、豊山正義は地頭富来忠義の請に応じて、応安四年万弘寺を東郡富来の小田来浦に開創し、更に報恩寺・安養寺を西郡田染に草創した。

これらに前後して不肯正受は吉祥寺を別府（今は日岡の向原）に、妙観寺を東大分牧に、瑞光寺を元町に又、密室正機は報恩寺を東郡奈多に開いて、東福寺一派の教線を拡張強化し、これらに伍して絶海門下の鄂隠慧奫、清拙門下の独芳清曇等があつて、夫々国東に安国寺、北郡丹生に大智寺（現在大分市）と化門を並べた。

貞親の弟大友五代の近江守貞宗も亦禅宗を信じ、帰化の明僧明極と唱和し又、万寿寺に入つた正具和尚に参禅し、或いは法華経二千部を開版する等、[6]大いに禅風の興隆に力を盡した。かくて多くの支派まで分出した豊後万寿寺は、九州東方に於ける臨済禅の中心となり、加うるに後来の絶海宗卓が、郡将の請を受けて西郡高田玉津に円福寺を開創したるが如く大朴玄素・雪村友梅・中巌円月・即菴宗心・白師祖稜等、それ〴〵各自の新教線を扶植することを怠らなかつた。

殊に万寿寺には景蒲玄恰、その弟子桂庵玄樹等の名知識も相ついで来つて禅風を発揮したのであるが、その玄樹こそ雪舟と共に入明し、帰朝後師僧景蒲玄恰を万寿寺に訪い、留錫していたのであるから、雪舟が豊後に来るようになつたのは恐らく、その友人であつた桂樹等の誘導にもとづいたものと思われる。[7]

曹洞禅に於いては、薩摩に在つた無著妙融が応永七年大友

氏の招請を受けて、豊後佐賀荘に入つて佐賀関？に洞光永泉寺を開創して参堕する者百余員を数うるに至つた。次いで慶永和元年には安国寺城主田原正晴に請ぜられて大嶽神宮寺に入つたが、更にその外護に拠つて、国東横手に泉福寺を剏め、安居の大衆五百余員を集め来たつて大いにその法幢を確立し、遂いに至徳上皇より祝国道場の賜額があり、その道風は広く北九州に宣揚せらるるに至つた。かくて泉福寺の隆盛と共に、無着門下の明巌鏡昭・月谷融諦等は、豊後国中特に国東半島一円に向つて法幢を樹立すること各々十有余箇所に及んだ。即ち前者は本護寺（東郡元豊崎村横手）泉正寺（西安岐柚木）・密乗院・常光寺（東郡熊毛）・梅松寺（西郡元三浦村小畑）・妙覚寺（西郡都甲荒尾）・泰雲寺（高田来縄）・英雄寺等の諸刹を開き、後者も又永照寺（東郡・横手）・多福院（西郡高田多福）・常聚院（国東・川原）等を開創した。又康暦・永徳前後に当つて流祖無着は宇佐郡和間村松崎に金光明寺を開いている。

ついでに豊前地域（大分県内）の禅宗の概況を記すると、宇佐地方に於いては栄西の宗風を承けた入宋僧、肥前水上万寿寺の神子栄尊が東方筑後から北上して筑前、更に東方に向つて豊前にまで教線を伸張し、寛元元年には遂いに宇佐神宮に接して、円通寺・妙楽寺の両刹を開き、熱烈なる伝道を行つた足跡を追い、鎌倉時代後期に当つて円通寺で出世した在菴普在は、先哲の例に倣つて宇佐神宮の旧勢力と結び、祠官宇佐公光の外護を受けて、鎌倉後期、北宇佐に光隆寺を開創した。而してこれに前後せる無隠元晦は、筑前・肥前の両州に化門を張つていたが、元徳の前後大友氏の帰向を受けて豊前に入り、神子尊栄が先駆した教線を拡張強化した。又暦応以降耶馬溪の大巌窟に蹲つた円龕昭覚は建順と共に、七百有余の羅漢を刻み、延文五年一千余員の衆僧を聚めて、慶讃供養して安心菴・羅漢寺等の基礎を固め、盛んに禅風繁興の機運を示した後である。

かくの如く我が豊後・豊前の両地方とも、鎌倉以降、大いに禅宗の地方的発展を見、雪舟を迎えるには極めてよき禅的雰囲気であつたと思う。

註① 細川・山名の両党派
② 日本の名画雪舟
③ 画聖雪舟
④ 禅宗の地方発展

⑤ 東郡は東国東郡の略、以下西郡は西国東郡の略、北郡は北海部郡の略

⑥ 日本古印刷文化史

⑦ 大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書

第二の理由としては、当時諸国は麻の如く乱れて戦争の絶え間がなかつたのに、我が豊後は大友十五代親繁、十六代政親父子の時代で勢隣国を圧し、其の居城府内の地は比較的静穏で久しく兵革を知らなかつたのであるから、徐ろに身を画道三昧に委ねようとする雪舟のためには、屈竟の場所であつたに相違なかつたのである。

第三の理由としては、我が豊後の地は山海の眺瞰に富み、烟霞の癖のある雪舟のためには、他地方の風山風水に比べると遙かに勝つて、その南画的な景趣は、雪舟を迎えるにより環境であつた。

第四は雪舟と共に入明して心交ある桂菴玄樹が文明五年帰朝して、其の師景浦玄怦を其の郷里周防（山口）より府内万寿寺に訪ねて迎えられ、更に肥後の菊地氏に招聘せられる迄の文明八年五月迄府内に居たことは、既に記した如く雪舟誘引に大きな力があつたことと思う。

三、天開図画楼の景観とその所在地

1. 「画聖雪舟」の沼田氏説

沼田博士は其の著画聖雪舟中に「この天開図画楼の設けられたところは今の大分町より、南行四・五町を隔てた上之原というところであるかと思われる。この処は小高き丘陵で眺望の極めて宜ろしきところである。今、其の勝概を茲に記せば、前は請はゆる菌蕚湾を眼下に瞰み、湾中、水、静かに翠嵐朝に山を抹し、繼光水色と相映ずる所、片々たる白帆風を孕んで往来し、関々たる白鷗は友を逐うて相戯る、若し夫れ遠く眸を放つて、遙に南方を望みば、水天髣髴の際、北豫の山脈蜒々として雲煙杳靄の間に眼るを見る。後には由布嶽の餘脈西より来り、聳えて四極の高峯となり、倒に影を波上に蘸す。大分川は近く其の東を流れ、分れて二派となり、河道蜒々として田畔の間に隠現し、実に天然の一大画図を開いた如くである。雪舟が天開図画楼を設けたのは、慥にこの丘上であつて、今は此処に宝戒寺といふ真言宗の寺がある。豊後の博古家佐藤鶴谷の説に拠ると、豊後提要記に、元亀の頃この宝戒寺の附近に清幽亭といふ一小亭があつたことを記

してあるが、恐らくはこの天開図画楼の遺物ではあるまいかと、又、好古家、日名子柚軒の説には、雪舟が天開図画楼の遺趾はこの上之原の続きである、今の大分なる七十二聯隊兵営（筆者註＝現大分大学学芸学部）の近傍の丘上ではあるまいかと、いづれにしても、この上之原附近であることは動すべからざる事実である。即ち右の文中、「滄海前に接す」とあるは即ち菡萏湾に当り、「群峯後に連る」とは即ち四極山で、「孤城左に聳ゆ」とは当時の高崎山の古城を指し、二水右に流るゝとは即ち大分川のことである。此の如く上之原の地形は、悉く前文の記事に一致するのであるから、この推定は決して誤つて居らないことゝ思はれる。」と説き。

2. 大分県史蹟名勝調査報告書（工藤氏）

大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書（筆者調査員工藤覚次氏）には

「勝地を豊府の西北隅に相攸す」とある勝地とは、今の菡萏の小島（古名笠結島）の附近の山手の台地にてはあるまいか、それは左の豊府主と老人との問答にても知らる。

慶長元丙申年八月府主(早川主馬首長敏)在二府内城一問二府之名所於府老夫一矣、答曰生石浦有二（茲に豊府最要紀には名の字あり）島一曰二笠結島一俗呼曰二生石小島一、島廻百歩高数仞頂有二老松数株一遥望レ之則似二古制（豊府最要紀には古勁とあり勁は頸か）結二頭笠一以レ故名二笠結島一土御門院有二御製之歌一是郡中名所也主馬首閲レ之即往見二笠結一有レ詩

何世海翁棄棄去　傍汀漂泊竹皮簑
旅舟古今往来客　一聽其名笑首肯

と豊府紀聞に見えて居るが、土御門院の御製とあるは彼の新後撰集に、土御門院御製として、笠結の、島たちかくす朝霧に、いや遠ざかる、棚無小舟とあるをいうたものであろうが、これは歌枕秋の寝覚（明和八年辛卯十一月吉日版）にもある、豊後の笠薩島（又の名笠結島）ではなく、彼の摂津の笠結島を御詠になつたものであろう。されど安永の頃由原八景の一つとして笠結島舟の題下に、従二位烏丸前大納言光栄卿の

雨により、雪にやどりて、浦舟も、
名を頼むらん、笠結の島

一山蓬萊向海東　江帆日々影浮空
島辺不独晴天景　雪廷烟蓬図画中

とある歌詩は我が豊府の勝地生石浦笠結島を吟詠せられた

ものである。

又寛永十四年の秋、行脚僧某の府内神護山同慈寺に来りし時、城主日根野織部正吉明、その文才あるを聞き、府内記を書かしめたるに、その文中の一節に

これより先き歌に由て笠結島の絶景を知り今や地に因て和歌の風逸を知る。

と記して笠結島の絶景を讃美してあることが豊府紀聞に見えて居る。

又脇蘭室先生の葛海漁談に

豊後郡村の古地図を観に、府内高崎の辺に島三つを見る、大なるを笠結と記し、小なるを仏崎、宇土（或いは宇土は宇立の誤写なるにやと附記してある）と記したり。笠結と称するは久しき名にや、此地方の人は古今集に載せたる歌を引てこの地とし、漁舟の往来今も日々絶えずと称するなり、しかるに其さす所の笠結島はむかしありて今はなし、今あるは一名小島と呼び府内高崎の間生石の浦にある一小嶼にて、島と云にはたらざるなり、若は笠結島の海に陥たるを、すこしのこりて存するを以て小島の名を得笠結の称を得るにやと記し

海原と、なりにし跡の、白波に、
昔を忍ぶ、笠ゆひの島

の歌が先生の著滝のやどりに見えて居る。若し先生のお説の如く、笠結島が今の島より大きくもあり、この外に仏崎・宇土の島々もあり、尚慶長の昔陥没したりと伝うる瓜生島や、久米半島など、大小の島々が海のかなたこなたに散布して居りたならば、又一段の絶景であつて、それこそ天の描ける画面を展開したるもののようにありし事と思わるるのである。

以上は何れも雪舟以後の記事であるが、社寺明細帳によれば、今より殆んど千百年前創祀せられたる生石浦興玉社の縁起書に「承和四年八月十四日、笠結島海中より出現、其時の国府大江宇久、当地に神殿を造営し火王社と号す云々」（興玉社は後に改めたるものか）とあり、又佐藤蔵太郎翁著豊後史蹟考によれば、八百六十余年前勧請の駄原村若一王子神社縁起書にも元よりこれらは勝地としての笠結島ということではないが、以上の縁起書に拠れば笠結島の名は余程古くから知られて居つたものであろう。

次に豊府の西北隅に相攸すとある攸は所也で勝地を豊

府の西北隅の所に見立てての意であろう。豊府とはいうまでもなく豊後の府衙たる大友氏の居城即ち上野館・府内館大友館或いは西山城・豊府城・大友城などの称有りし今の大分市大字上野字御屋敷の地を中枢とし、大友時代の繪図面に見ゆる大友役所、並びに蔵場を中心として、最南の三宝院町（今の元町の南端）最西北端の長池町、東北方の坊ケ小路町等の四十余町を包容したる附近一帯の地域を総称したるものであろう。そうして豊府の西北隅とは西は丘陵に、北は蒼海に局限せられたる一隅に辭在して居る所の古来勝地として詩歌に吟詠せられたる笠結島（今の菡萏）の小島の附近、山手の丘陵の崖頭の辺を見立てたものであろう。

一小楼を瓶作し榜に題して天開図画楼と曰ふ

とあるは勝地を豊府の西北隅の所に見立てて一小楼を創作し楼名を天開図画楼と題したものであるが、その天開図画とは天地開闢其の始を為すなり、春秋四時並に図を彰はすと云はんが如しの意であることは了庵桂悟の書かれたる、雪舟周防（山口）の廬居即ち後の天開図画楼記の行文に拠りて知らるるのである。

「滄海前に接し」

とあるは菡萏の滄海近く前に接したるをいうたものであろう。

「群峯後に連り」

とあるは高崎山の支脈蜿蜒起伏東走したる丘陵を隔てて霊山・有蔵・本宮等の群峰後方に相連なるを指したものであろう。

「孤城左に聳え」

とあるは高崎山の山嶺高く左に聳ゆる高崎城を称したものであろう。

「二水右に流る」

とあるは大分川の本支流右方に流れるを指したものであろう。大友時代の繪図面を見るに二水並び流れ、その東に大川筋の記入ありて今津留村の東を過ぎ、沖の明神島の東にて海に注ぎ、その西流は今津留村の西を流れ長池の船入長浜宮の北を迂回し湊船入の辺より右折し、沖の明神の西にて海に注いで居る。

これを要するに豊府の西北隅の勝地を笠結島、今の菡萏小島の附近とすれば位置排勢天開図画楼記の前文の数節に

極めてよく合致するのである。そうしてその地点は笠結島を数百歩の山手なる丘陵の崖頭、旧府内藩主大給侯の海南荘の辺にてはあるまいかと思わるるのである。大友氏時代豊府より速見・国東乃至豊前方面に通ずる本街道即ち今日の国道は、生石浦秡川（二葉川と書きたるものあり）を渡り、由原参道を登り、大山村・由原村（由原八幡社の北通り）を経て高崎山の南半服を廻りて銭瓶を越し速見郡に入り、赤松村・田野口村を過ぎ浜脇に出で、以つて国東・豊前方面に通ずる要路に当り、交通の便も良く、又豊府の大友館・万寿寺の五重塔・春日の社など近く指呼の間に隠見して居るが、府を隔つる里許の西北隅に僻在したる世俗塵外の別天地であるので、悠々画筆を親しむ雪舟の廬居としては上乗の地域であつたであろうと思う。されど遺蹟の在するものは元より無く、文書記録の拠るべきものも亦無く口碑伝説の伝うるものもこれ亦無いのを（旧府内藩古老の語るところに拠るも、昔あの辺はカニクラというだんだら畑であつて、浜の市大花火の有つた所である。別に雪舟に関する口碑伝説については聞いた事が無いと）遺憾とするのである。」と書いてある。

3．結　論

前掲沼田・工藤両氏の所説よりすれば、天開図画楼の所在地は大体

1．一般には上野台地（上の原）
2．日名子説の学芸学部上の台地
3．工藤寛次氏の豊崎説（西大分）

の三つに分れ、上野説が又

1．現大分大学経済学部附近と
2．宝戒寺附近

との二説に分れるようである。私も大部分の人が唱える様に上野説をとりたいと思う。それは

才一、天沼博士が詳記してあるように天開図画楼記に記してある景観に一番よく合致しているところは上野の台地であり。

才二に万寿寺の桂悟禅師をたよつて来たものとすれば、万寿寺の近くである上野が何に彼と都合がよい訳である。

才三、其の上、上野台地は、当時の府内の市街地に程近く、而かも景観がよく閑静で画楼を設くるのに適地であつた。

才四、他の二ケ所特に西大分豊崎は、当時前には瓜生島が

あり、神宮寺浦が近く、粹原参道を経て別府に通ずる地点で閑静でなく、且つ瓜生島の景観は少しも書いてなく、高崎山は左後ろにあたつて見えていない。尚万寿寺に遠く、文人墨客の訪ぬる地点としては上野台地に比較して甚だ条件が悪い。又学芸学部上は附近には人家も余りなかつたし、交通も悪く、人の住むには甚だ不便であつたと思う。従つて雪舟はその画楼を営む地として選ばなかつたと考えられる。

ところで上野説では大臣塚は今でも万寿寺の所有で、当時は蒋が池から続いてその境内であつたのだから、その点では現「あけぼの寮」附近が条件がよいと思うが、只々豊府の西北隅とは申されない。それで私は佐藤蔵太郎氏の説もあるし、今の上野変電所西隣の壇の元一帯の台地か、墓地公園の高台であつたのではあるまいかと推定するが。墓地公園とすれば大友屋形を眼下にするので壇の元が有力でないかと思う。かつての県史蹟名勝の調査員の一人であつた故前田多三郎氏も、何にかに同地説を書いてあつたかの様に思つている。

四、雪舟府内（大分）在住当時の生活

雪舟はその画楼、天開図画楼を大分市上野の勝地に起し、日夕此処に起臥し、多年練磨の神腕を揮つたのであるが、其の画を作るにも、尋常の画人とは頗る趣を異にして居つたのである。雪舟の詩友、万里が万花無盡蔵に記してあることを見ると、雪舟は画を作るに先だち、半酌の酒を飲み、稍々微酔を呈する時、快く尺八を吹き、国歌を咏じ唐詩を吟じ、興に乗じ筆を呪い、そうして紙に臨むのであつたが、さて其の紙に臨むこととなると、恰かも龍の水を得たようで筆躍り紙鳴り、道釈・人物・花卉・鳥獣・悠久に紙面に描き出されたのである。若しこれに飽いた時は、直ちに筆を投げて欄に凭り襟を披いて、而して海山の眺を恣にして、更に画趣を養つたのである。是れ故に身は遠く京洛を離れて豊後の僻地に隠棲したのであるが、而かも其の名は全国に喧伝せられ、名声は籍甚して画を需むるものの多かつたことは、天開図画楼記に「故に上は公侯貴人より、下は浮屠氏工商の徒に至るまで数点の残墨を求めんと欲して、来往踵を踵ぎ、鉄門限を以つて称せらるるも亦豈それ誣ふべけんや、戸に入りて其席次を窺見するに、粉奏区画筆、左右雑還、幅の大なるもの、幅の小なるもの、絹の細かなるもの、紙の素きもの、己に画き出したるもの、未だ画き出さざるもの、巻起して棟に充ち、裝

潢して壁に掛け、斯くの如くにして則ち粉を呪ひて日を終へ、丹を研いて月に渉る、志倦み神疲るるの時、欄に凭りて一拍し、襟を拔いて風に当り、屢〻蘇息寮肺して、以て意を繪事に寓す」とあるのによつても其の一班を推知することが出来る。①

かくて画楼での生活に倦めば飄然として出で、近くは県下の名勝の地を訪ねて、沈堕に、日田に、又耶馬にその足跡を印し、遠くは九州各地を遊歴したのではあるまいか。

註① 画聖雪舟・日本絵画史上巻

五、雪舟府内（大分）在住の期間

工藤覚次氏は大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書に「雪舟は何時我が豊府に来り、在留幾年にして豊府を去つたか、それらの年月は明らかでないが、良心の天開図画楼記を書いた文明八年は、雪舟の五十七歳の時であつたことは、彼が八十七歳の高齢を以つて、石見国大喜庵に示寂したる永正三年八月八日より逆算して判かる。そうして又明国より帰朝したる文明二年も五十一歳の時であつたことも同じく永正三年よりの逆算によりて知らるるのである。又雪舟が豊後を去り大内氏の周防（山口）に在りし時の盧居、天開図画楼後記を了菴桂悟の書いた一節に、雲谷の齢古稀に垂んとし云々とあるより、これを六十八・九歳の長享十二年の頃と見ることも出来よう、そうして又同楼後記の一節に一雪舟本朝に帰えり、豊の後州に寓すとあるより、雪舟五十一歳にて帰朝し、幾何もなく、我が豊州に来遊ありしものと思わるるので、これが五十一・二歳の文明二・三年の頃であろう。そうすると雪舟の我が豊府来遊は文明二・三年の五十一・二歳の頃にて良心の天開図画楼記の成つた、文明八年の五十七歳までは、明らかに在留し、庵桂悟の天開図画楼記の成つた六十八・九歳の長享一・二年頃まで、十一・二年間のその幾何を豊後に遊びしか消息不明である。」

と記し、熊谷宜夫氏は、国華七百号中で①

文明五年の安世永全像賛に於いては、雪舟を「今在防城」とするのみであり、この後に文明八年の良心呆夫の天開図画楼記による豊後在住の事実が来たり、更に文明十三年美濃霊薬山に於いて万里集九と邂逅することが、後者の梅花無盡蔵「雪舟余為作金山図並叙」に明であり、帰朝後の雪舟が文明五年周防に在ることを以て定住的な事実と解する

のを躊躇せられよう。動かし得ない文明八年の豊後在住が、雪舟と同時に入明し、文明五年帰朝した桂菴玄樹が山口出生の人であり、帰朝後周防より豊後万寿寺に迎えられ、更に肥後菊地氏に招聘せられる時期に対応することは、その豊後在住の理由を示唆するかに見える。なお、良心呆夫はおそらくこの時再び入明の途次豊後に立寄つたものと解せられ云々」と述べ、更に其の著「日本の名画雪舟」中に文明五年、渡明を志して周防に来た医師永全安世に会い、その像を描いているが、この記述は文明十二年（一四八〇）のことであり、むしろ雪舟が周防（山口）にあるとする点はこの年に係けるべきかと考えられる。これ以前、文明六年（一四七四）には、弟子である雪峰等悦に、「彷高彦山水図巻」を与え、同八年（一四七六）三月には後のため呆夫良心が「天開図画楼記」を記した。これによれば豊後大分にあつて、景勝の地に彼の画房天開図画楼を建て、繪事に専念することを詳細に叙している。しかしいつたん安定したこの生活も、その年六月にはこの地の名刹、万寿寺住持として招聘されていた桂庵玄樹も、同地の兵乱を避けて立ち去るので、雪舟の大分在住も桂庵との関係と推定せられ、同時に終焉を告げざるを得なかつたであろう。この前後の作品と推定し得るものに同地の「鎮田瀑」がある。」と記されてある。

註①同書七百号一九一頁

六、雪舟の二豊遺跡

雪舟が豊後に居た年数は詳かでないが、決して一処に定住したとは思われない。前にも記した如く、詩僧万里の梅花無盡蔵にも「帰棹を鼓し、小茅を筑紫城に結び、興に乗じて諸州に遊戯し、行履滞るなし、風塵表の質あり」と記してあるが如く、行雲紫水四方を歴遊したのである。さてこの筑紫城とあるのは、無論府内城下の天開図画楼に居つた時であつて、当時雪舟は興に乗じて九州諸国を歴遊したことと思われる。①それで九州各地には、今も尚、雪舟に関する口碑伝説を留めている所が多いのである。

日田郡三芳村（現日田市内）字求々里（くくり）に医王山正法寺という禅刹があつたが、何時の頃か廃たれて、其の跡は今もシャウブジといつて、里人は雪舟の居住した所であるといい伝えている。此処には仏像を岩石に刻んだ所があるがこれが雪舟の作であるといい伝えられている。②

又、同郡元大鶴村大字鶴河内に桐尾・小鹿田（おんた）中村・宮尾などいう所があるが、何れも雪舟留錫の口碑があり、雪舟の造庭と称する庭がある。中にも中村・桐尾・小鹿田にはこの地方で御杣頭という他地方のお庄屋に当る家があつて、その庭園は何れも雪舟の築いたものという口碑がある。この内中村の坂本氏の庭が今日も一番よく保存されて昔の面影を見ることが出来るが、古く日田が生んだ郷土史家、森仁里（春樹）の著「造領記」には次の如く書いてある。③

「坂本氏は日田家より出たれども、其始を詳にせず、墨は坂本村の山中、原の城と云所也、坂本氏の別荘鶴川内村の奥中村と云ふ所に在し也。其傍に金龍寺あり、此寺の仮山は僧雪舟彦山より来りて築く。

春樹曰、この雪舟は備中国の人にて、国々、猪山の法福寺その寺なりといへり。文明の比の人にて画に名高く、世人の知る所也。唐土に渡りし人なれば、渡唐の往来、彦山に来寓せし成べし。其故に同山の座主院に今尚其画多く残れり。又同山亀石坊の仮山をも造れり。此時坂本氏の別荘にも来りしならん。金龍寺の旧地、近年寛延・宝暦の頃、俳人淡々門人、讃岐の節山といふもの鶴河内村に来て、其地に草庵を建て不識庵となづく。其庵今猶在、仮山は廃て聊そのおもかげのみ残れり。庵後に坂本道烈夫婦の墓碑、大なる石二ツ立り。道烈は天正より文禄・慶長の間に在し人なり。柳河の立花宗茂侯と親くて、彼の家に客たりし事浅川集と云記録物に見ゆ。道烈から子孫数家有。其中鶴河内村の鬼田と云ふに孫三郎とて旧家の組頭有、家抱数十家を持たり。」と。

又同人著「日田郡志」中には次の如く出ている。先づ上巻「流偶」の項に」

雪舟、鶴河内村に雪舟庵の跡あり。仮山あり。其妙也。同村之内、中村と云所にも、雪舟の築たる庭あり。今に存す彦山亀石坊の築山と同時の事なり。」

とあり、次いで下巻には「古墳古墓」の項中「雪舟仮山の追考」として

「今傍ニ草庵アリ。是近世讃州丸亀ノ産、節山ト云、俳人来テ庵ヲ造立シテ号ニ不職庵一ト。節山ハ浪花半時庵淡々翁門弟タリ。不職庵ノ額アリ。清人沈草亭書レ之。

草庵普請所にて

蝸牛木屑の中の昼寝かな　　不職庵主節山

草庵楼上

猶茂れ三葉四ツ葉の荷ひ軒　　同

勧化場も又年の修理やかんこ鳥　　同

とある。

桐尾の伊藤家の庭は現在は僅かに小さな池の中に亀甲型の中島がある位で、小鹿田の坂本氏の庭は相当立派なもので、明治末期迄はあつたが今は取りこわされて跡型もないと同地出身大分在住の医博伊藤駒夫氏の話である。

因みにこの小鹿田の御仙頭坂本家は、幕末頃までは歴代製紙を業としていて、雪舟の使つていた画紙は、この家から製出したものであつたとの伝承がある。④十時英司氏の「大分県史蹟・伝説地詳図」中には大鶴村字白岩には雪舟の茶器が現存すると記入してある。

其の他日田には宮尾（宮尾雪舟）森山某の庭園、千倉（元三和村、現日田市内）某家の泉石、及び下毛郡元三郷村大字中摩字中詰、⑤吉峰某の躑躅園、同下郷村宮園、小笠原某の庭園等、何れも雪舟の築庭と伝承されている。⑥其の他大野郡沈堕の滝はその足跡であることは既に記したところである。

附記すべきは、かつて府内城主であつた竹中采女正が、寛永六年彦山に詣でて亀石坊に宿した時、庭前の仮山を見て「是雪舟（俗姓者長谷川和尚所築之仮山、乃如レ繪、以諸人為二奇観一、重興見レ之帰二于豊城一」と豊府聞書に書いてある。この庭は今日も殆んど原型を留め、よく保存されていて国定公園彦山の観光資源の一つとなつている。

以上記した様に雪舟は豊府の天開図画楼を根拠として県下各地を周遊したものと思うが

1. 鎮田の瀑は、当時豊後才一の大きな滝として有名であつたので、その景観を見るべく行つたもの。
2. 彦山は当時西国修験の総本山として沢山の坊中もあつて、非常に繁昌していたので足を向けたものと思われる。
3. 日田各地の雪舟由縁の地は、或いは彦山に近く、且つその通路にあたり、日田市光岡の岳林寺には弟子もいたのであるからこれ等の地方にその遺蹟のあるのは必ずしも牽強附会とは思われぬ。
4. 彦山を尋ねた雪舟が景勝の耶馬溪方面に下つたのは当然のことで、従つてその山麓の村に遺蹟のあることもいぶかしいことではない。
5. この外県下には、必ずや多くの足跡があると思われる

が、ただ四百五十年の長年月を経たる今日、全く忘れられ、且つ記録文献がないので知ることが出来ないのであると思う。

両筑の足跡

さて雪舟は豊後を出て、豊前・筑前・筑後地方を歴遊したものの如く、筑前宗像郡野阪村の大鼓田は三町余歩の田地であるが、田植の際は鐘太鼓を打ち鳴らし、部落の男女悉く群集して古風な謡を歌いながら苗を植える。田の所有者は雪舟作「四時稼穡図」の屏風を所有しているが、これを俗に生き繪と称して田植時に至ると自然に緑色を生ずると申し伝えている。又この村の内に雪舟という小字がある。此処には蓊鬱たる森林を繞らし、せん渙たる清泉が流れている。里人はこれを雪舟の居趾といい伝えている。又筑前芦屋の名産、芦屋釜には松・杉・梅・竹及び山水などの景色を鋳出したものがある。雍州府志には、これは雪舟が大内氏の招聘に応じて山口に往来した頃、冶工の依頼に応じて下繪を画いたものであると記してあるが、それは誤りであつて、恐らくは雪舟が九州巡錫の時であつたろうと思われると沼田氏はいつている。[7] 笹川稚郎博士はこのことを筑前の芦屋に逗留の時鋳工が来て真山水の繪を茶釜に乞うたから、需に応じて描き与えた。此の釜を冨手と名づくと伝えられていると書いてある。[8]

尚、筑後下妻郡小田村の禅院建仁寺の庭も雪舟の作といわれているが今は荒廃している。又同国高柳に淹留の時、扇の地紙に画を描いたとも其の著に書いてある。[9]

国華七百号の雪舟特輯中、米沢嘉圃氏は「益田兼堯像」の題下に書いてある内に

「……大内氏は当時、周防・長門・豊前・筑前・安芸・石見の諸州を領していたのであるから、雪舟の居住は雲谷庵を中心として、大体大内氏の所領乃至はその勢力範囲以内の地に限られていたと見てよいであろう。そしてこのことは、雪舟が大内氏の庇護の下にあつたことを示すものであり、行動の自由は与えられていたにせよ、結局御用繪師的存在であつたことを物語るものであろう。従つてその顧客も「上は公候貴介より、下は浮屠氏工商の徒に至る」人々であつたわけである。」

と呆夫良心の我が天開図画楼記の一節を引用しているが、当時大内氏は西軍で我が大友は東軍に応じていて、共に相反目し、干戈を交えていたのであるから、少くも米沢氏の所説は

我が大友氏には該当しないと思う。

註①②画聖雪舟

③ 大分県史蹟名勝調査報告書

④ 画聖雪舟

⑤ 中摩郷土誌に「雪舟の庭中詰にあり林泉を築き数十種の躑躅を栽へ木古りて大さ尺に及ぶ奇趣なきが如きも屢々同如者の来観あり昭和三年秋九州帝国大学農芸学部教授永見健一氏の調査あり」とある。

⑥ 大分県史蹟名勝調査報告書

⑦ 画聖雪舟

⑧⑨江戸以前日本絵画史

天開図画楼址に就いての郷土の関心

久多羅木儀一郎氏は「新豊州」①紙上に次の如く書いてある。

（前略）雪舟が大分（府内）に来往し天開図画楼というアトリエを構えていたということは、豊後の古書・日記に記されたものを未だ見受けず、従つて一部博識篤学の士は兎に角、一般には明治年間までは全く知られていなかつたようである。ところが明治四十四年（一九一一）八月上旬、大日本国画教育会大分県支部の主催で、大分女子師範学校の講堂（現長浜小学校講堂）において東京美術学校教授福井江亭先生を講師として、没骨法の講習が四・五日ほど開かれた。この講習中に、美術学校長正木直彦、同校教授寺崎広業の両先生も来られて科外講演をされたが、その時正木校長先生は、同校所蔵の雪舟筆「豊後鎮田瀑図」の巧芸図を持つて来られて示され、文明八年（一四七六）当時、雪舟は府内に天開図画楼を築いていたことを話された。これから雪舟の大分在住のことが当地方に漸く知られるに至つたようである。そしてこれはズツト後年に聞いたことであるが、このとき正木校長等は画楼の址を探訪されたとのことである。松本古村画伯が天開図画楼と刻した款印を作つたのもこの後のことと思われる。ついで大正に入つて沼田頼輔先生の画聖「雪舟」が刊行され、その中に古画備考にある天開図画楼記の原文も紹介されたので、当地方の郷土史家の間にも、画楼記によつて画楼址の研究が始められた。その最初をなすかと思われるのは、大正六年（一九一七）七月下旬、大分市主催の夏期講習会が大分才一小学校（現金池校）の講堂で開かれたとき、講師大島支郎先生の郷土史講義において、画楼記の初めの部分を謄写刷にして配布され、先生の研究するところを発表されたことがあ

る。（後略）、

筆者曰くこの外、郷土史家の先達、佐藤藏太郎・日名子太郎氏等が関心を持つて調査研究されていたことは「画聖雪舟」中の文中よりも知ることが出来る。殊に特筆大書すべきは故工藤覚次氏が県史蹟名勝の調査員としてその調査研究の結果を「豊後に於ける雪舟遺蹟」として報告し、同報告書才輯に收録されていることである。

註① 大分市田室町で発行の旬刊紙。昭和二十一年六月五日附才五十二号「画聖雪舟と大分」の特輯号

② 当時女子師範学校図画教師で案内役をした故梅藤種男氏も上野高商附近を共に探訪したと筆者に話された。

③ 大正でなく、初版は明治四十五年二月十日発行である。

④ 本書に採録してある通り画聖雪舟記載のものは原文の書き下し文である。

八、大友氏と天開図画楼

県の史蹟名勝の調査報告書には「良心の書いた天開図画楼記には、豊府大友氏が雪舟をその廬居に往訪された意味の記事が更に見えて居らぬようにある。たといそれらの記事が見えぬとしても、絶対に往訪されぬものとはいわれぬが、思うに大友家は才九代氏継より、才十四代親隆に至る数代の間は父子相伝えず叔姪相譲つた。蓋し互いに情誼を守つたものであろう。然るに才十五代親繁は寛正六年五十五歳にて従兄親隆の譲りを受け、従来の例を破り才十六・七代を長子政親、嫡孫義右ゑと伝えた。（中略）如之文明初年には豊前の城井・長野二氏の反逆、政親の出征討伐、同五年には政親へ家督相続等ありて、雪舟豊府在留の文明の頃は、大友家にありては内外多事であつた。従つて親繁・政親の父子を初め、その僚属には豊府とは指呼の間に在る雪舟を天開図画楼に往訪の余裕も或いは無かつたのであろう。」と書いてあるが、雪舟が文明八年に豊府に居たことは天開図画楼記で疑う余地はなく、何人も認めるところである。

文明五年には大友親繁・少弐頼忠等と共に、兵を起して、細川勝元に応じ、大内氏方の城井・長野氏等と豊前に戦つてはいるが、格別のことではなかつたればこそ、その前後何れかに雪舟は豊後に来た訳で、もしそれ程さわがしかつたら、豊後に雪舟は足を入れなかつたと考えられる。且つ又親繁父子並びにその一家一族のものが雪舟の画楼を訪ぬる余裕のない程豊後が多事多端であつたとは私の知る郷土の文献には出ていない。殊にそれ程豊府城下が騒がしかつたら、良心が図

画楼記に「故に上は公侯貴紳より、下は浮屠氏工商の徒に至るまで数点の残墨を求めんと欲して来往踵を接し、鉄門限を以つて称せらる。亦、豈、誣ふべけんや云々」とは書かないであろう。私は鎮田の瀑の図が最初大友氏の所有であつたと伝えられる位であるから、公侯貴紳の内には、大友の一家一族の者も、必らずや加わつていたことと思う。

工藤氏の論拠は自己の主張する天開図画楼の所在地を、西大分・豊崎と限定しての所説であるが、世人の殆んどが認むる上野台地をその所在地とすれば、大友屋形とは隣接地であるから、必らずや大友氏と雪舟とは何等かの交渉があつたものと思われる。

九、宝戒寺境内雪舟記念碑

1. 建立迄の経過

上野に寓居を定めた筆者が、いささか雪舟に関心を持つて、多年これが調査研究をするにつれ、市民に関心のないのに驚き、何んとかして雪舟と大分の関係のあることを、世人に知らしめたいと考えた末、先づその標示となる記念碑を建てることにしくはないと思い、昭和二十六年宝戒寺住職宗尊照氏にはかつたところ、賛同を得たので、市長時代に幾つかの記念碑を建て、この種事業に理解ある故高山英明氏に盡力方を懇願、大いに賛同されて種々画策され、記念碑建設委員会を設け市長上田保氏を会長として寄附を集めよとの教示によつて、門徒総代菊川作次郎氏と宗住職それに筆者と三人で市役所に市長を訪ね、雪舟顕彰とその方途等趣旨を説明し、賛同の上会長として之れが実現方を願つたが、予期した協力を得なかつたので止むなく時期の到来を待つこととなつた。然るに翌春、宝戒寺では戦時に供出した釣鐘の代りを造るため寄附金を集める序に、昨年来懸案の雪舟記念碑をも建てることになり、同寺又は奥川氏方で数度の協議をして二千円以上の喜捨を仰いで建てることになつた。

2. 募　金

高山英明氏の筆で左記趣意を書いた寄附帳を持つて宗住職の奔走、門徒総代其の他の応援で左記の通りの募金が出来た。

寄附御芳名

画聖楊公雪舟ハ後土御門帝ノ応仁元年明国ニ渡リ居ルコト九年、当時ノ諸大家ト交遊シ其蘊奥ヲ究メテ帰朝シタガ、

故アツテ我上野ケ丘ニ留マリ、小屋ヲ構ヘ「天開図画楼」ト唱ヘ得意ノ妙筆ヲ揮ヒ、我北宗画壇ニ一新紀元ヲ劃セリ。留マルコト七年、飄然山口ニ向ツテ飛錫ス。歿後四百五十年。今茲地方有志ノ後援ヲ得テ、碑ヲ建テ史跡ヲ永久ニ伝ヘントス。冀クハ大方ノ諸賢奮ツテ御賛助ヲ垂レサセ給ハンコトヲ

敬白

昭和二十七年

発起人　大分史談会長　高山英明
大分県美術協会長　権藤種男
大分市長　上田保

金剛宝戒寺惣代
菊川作次郎　奥川元市　小橋多一郎
川崎喜市　徳丸信太郎　木村房次
柴田伴四郎　平松良平　島村武彦

金剛宝戒寺才四十二世　宗尊照

金参千円也　大分市長　上田保
金五千円也　大分合同銀行　後藤三郎
金弐千円也　大分県副知事　佐藤勝蔵
金五千円也　大分バス株式会社　佐藤恒彦
金弐千円也　日本通運株式会社
支店長　岡部治恒
金弐千円也　大分日産自動車株式会社
取締役社長　橋本新一

金弐千円也　寺司博行
金弐千円也　後藤十四馬
金弐千円也　西尾博
金五千円也　大分交通株式会社
金弐千円也　安岡拙治
金五千円也　菊川作次郎
金五千円也　奥川元市
金五千円也　徳丸信太郎
金弐千円也　吉村益次
金参千円也　木村房次
金五千円也　藤井文雄
金弐千円也　柴田伴四郎
金弐千円也　平松良平
金五千円也　小橋多一郎
金参千円也　坂巻六助
金弐千円也　島村武彦

3. 落成

金池町玉田石工店の手によつて出来た記念碑は、昭和二十七年五月四日、午前九時から営まれた梵鐘供養大法会に引き続き、午後二時から山門前に建立された記念碑の除幕式と、雪舟四百五十年祭大法会が行われた。

宗武子さんによつて除幕された碑は、高さ約一丈三尺、永興石で碑文は高山英明氏の筆である。

この除幕式に郷土出身京都在住の福田画伯から祝電を寄せられた。

4. 記念碑

記念碑の正面には

画聖
雪舟 天開図画楼趾

両側に

画聖雪舟四百五十祭虔修記念

昭和二十七年五月建之

と刻し、裏面に次の碑文が書いてある。

画僧雪舟ハ本姓小田氏、名ハ等楊字ハ雲谷又雪舟ト号ス備中国都窪郡三須村赤浜ノ人後土御門帝ノ応仁元年明国ニ渡リ画法ヲ広メ呉道玄宋ノ梁楷子ニ学ビ研鑽多年名声一時ニ揚リ欽然帰朝シテ間モナク我豊府ニ来リ画室ヲ上野丘ニ構ヘ「天開図画楼」ト榜ス此ノ間同好者ノ寸縑天素ヲ需ムルモノ応接ニ遑ナク其代表作タル沈堕ノ瀑布ハ現東京芸術大学文庫ニ珍蔵セラル斯クテ師ハ周防ノ山口ニ移リ山水長巻ヲ揮灑シテ永正三年八十七才ヲ以テ入寂シタ顧フニ我南豊ノ芸術ガ古来益々発達セルハ雪師ノ剛健卓拔ナル構想ト燦然眼ヲ奪フ技巧ノ感化ニ負フ所四百五十祭ヲ虔修シ併セテ一小碑石ヲ建テ雪師ノ遺跡ヲ後昆ニ伝フト云爾

昭和二十七年壬辰五月　春浦八十一叟撰并書

建碑主唱者

大分市長　大分史談会
宝戒寺住職　大分県美術協会
同寺　総代々表　上田保
宗尊照
菊川作次郎
奥川元市

賛助員

細田徳寿　佐藤勝蔵
後藤三郎　藤井文雄
大分交通株式会社　大分バス株式会社
後藤十四馬　安岡拙治
坂巻六助　西尾博
寺司博行　橋本新一
岡部治恒　吉村益次
立川輝信

以下宝戒寺総代

小橋多一郎　徳丸信太郎
川崎喜一　木村房次
柴田伴四郎　平松良平
島村武彦

5. 最初の構想

筆者が最初に考えていた構想は、記念碑の周囲を雪舟の手

法による庭とする積りであつたが今は実現出来なかつた。その他最初に考えていた記念事業の構想は

イ、記念碑の設立

ロ、築庭（記念碑の周囲を）

ハ、雪舟遺品の展覧会

　県下に現存する雪舟並びにその師弟関係の書画其の他の遺品

ニ、雪舟と大分県関係の出版

ホ、記念法会と講演会

ヘ、其の他

であつたが幸いにも大方諸賢の理解と時期の到来で逐次実現を見つつあるのは只に筆者のよろこびでなく本県市としても大いに賀すべき事ではあるまいか。

十、雪舟画鎮田の瀑と現況

既に記した如く雪舟の画いた鎮田の滝は、雪舟がその実景を描いたもので、一四六七年五十七歳頃の作と思われるが、これは紙本竪二尺余、横三尺余のもので中央の巌壁に「豊後州鎮田瀑雪舟之写」の落款があり、豊後国古蹟名寄に、[1]「雪舟が此の瀑の真景を写したるものは大友氏に伝わり、後肥後の加藤氏に贈れり。加藤忠広除封の時、徳川氏に没収せられ後又津軽家に賜ふとぞ。山鹿素行の話あり、岡の中川家には狩野常信が雪舟の図を再模せし者有とぞ聞ゆる」とあり、その後津軽家より出て、如何なる経路をたどりしか知る由もないが、東京の故高田慎蔵氏の有に帰して、同家に宝蔵中、大正十二年九月一日の関東大震火災の際、宝庫と共に焼失したが、幸いにも芸術大学にその模写があるとのことである。[2]尚実物写真があつて今日も次ぎ〳〵と複写されている次第である。

雪舟描写の図柄は単に雄瀑のみを正面より描出したものではなく、雄瀑と、その雄瀑を相去る一町許りにある雌瀑とを取り入れ、その雌雄相対する中間に錯層せる千姿万態の怪巌奇石を描出し、その中央の巌壁に、前記の通り十字の落款をして印影を施し、その左側には深潭に臨む懸崖の蟠松を加え、又その右側雌瀑の巌頭には遠く数株の樹間に隠見する廬屋を按排してある等、自然の景致を一幅の画面に捕捉してある。[3]

熊谷宜夫氏は其の著「日本の名画・雪舟」中にこの「鎮田瀑

」に就いて次の如く説明している。

一四七六年ごろ

高田慎蔵旧蔵

桂幅　紙本墨繪　41.8×87.3cm

大正十二年（一九二三年）の震災によつて焼失したが、写真によつて原図を知ることが出来るのは幸いである。

スカイ・ラインを示さない構図は、他の当時の水墨画として例あるを知らない。この閉された画面で、はたして自然としての奥行なり、深さを実現し得るであろうか。「天開図画」とは自然を意味し、天空の闊濶を描いて自然の奥行きを示唆するのが、山水画の常套であつた。しかし、この図の鞳々と落下する瀑布、沸々と湧躍する水波の渾然たる律動は、岩を、山をゆり動かして自然へと浸透する。画家雪舟の仕事は、その律動を身に感じつつ、閉された岩壁に向かつて体当りをして、自然の深さを追求した。まことに坐して窓外に風物を視るような、周文時代の詩画軸とは異質的な自然の追求である。ここには、ただ視覚に訴えるばかりではなく、皮膚に感ずる自然の表現がある。こうして雪舟のリアリズムは、視て、行動を意識して描くところに構成された。そこに点景人物を配して説明することも要しない。画面いつぱいに雪舟の体当り的な、たとえば、落ち来る瀑を堰上げんとするかのごとき巨人像を感ずるとすれば、不当であろうか。画面を支えるその力は、すでに若さといえないが、まさに老いざる巨人のそれである。真実に肉迫する点では、入明時の「四時山水」に比して、いつそうに深いものがあるのを認めざるを得ない。と。何時頃の作か筆者は知らないが、この雪舟の鎮田の瀑の実物大の木版画があるが、明治以前の作であることは間違いないと思う。

こうした景観を持つていた沈堕の滝も現在は九電の施設水力発電所となり、崖頭より数十間の上流に堰堤を築いて、湛えた水を引いて発電用に供しているので、今は昔のおもかげは少しもない。只々堰堤のアラテともいうべき流口より一縷の水が流れ落ちる外、平水時は殆んど一滴の水も流れ落ちてはおらず、ただ眼に映ずるものは磊々たる几立せる盤石の露出と、崩壊せる岩石が算を乱して河身に堆積せる殺風景の場面のみとのことである。⑤

昭和八年大野郡教育会編「我等の郷土大野郡」中には

往昔は「沈堕の落ち口や十二口、下には大蛇七頭」と俚謡其の儘の偉観なりしも輓近発電所の設立により水勢頓に貧弱となる。」と、書いてある。

県下他の雪舟足跡地と称する所には或いはその造庭と称するものが残り、或いは何等かの伝説が残つているが、これ程の名画の残るこの地に雪舟に関する何等の伝承も今日ないのは、当時写生に行つた雪舟が風来坊の旅僧姿で行つたので、里人の知る所でなく、従つて問題の人物とならず何等の伝承もないのではあるまいか。

註① 後藤碩田の著
② 大分県史蹟名勝調査報告書
③ 同前
④ かつて三重野幸夫氏が所有していた。
⑤ 大分県史蹟名勝調査報告書

十一、昔の沈堕の滝の景観

沈堕の滝の現況は前述の通り甚だ殺風景な水のない滝となつている。然るに今年（昭和三十一年）五月号のミュージアム雪舟特集号に於いて、田中一松先生は、この雪舟鎮田瀑の説明を「この作品は断崖の重なりあつた岩組を初め、樹立ちの繁みや、とどろき落ちる瀑水の様子まで、今日の実景に彷彿たるものがあり、数百年の星霜を経たる蒼古たる中世画とは思われぬほど鮮かな迫真感に満ちている。」と激讃しているが、恐らく現況を知らずに書いたものと思うが、発電所設置前はまさに雪舟画を彷彿たらしむる景観であつたことは左記大分県刊行の「豊国小志」（明治四十年十月十日発行）の記事によつても了知することが出来る。

沈　堕　瀑

第一　瀑布の偉観

大野郡大野村字矢田に在り、大野・緒方二川の水、諸渓流を導きて此に至り、合して一となり、懸崖より下る。瀑の高さ九丈余濶さ百余歩、其潭深うして測る可らず、崖上は危石磊々として尖起するもの、鉾を列ねるが如く、激水急湍触衝して其間を下り、直垂分れて十三条と為り、遠く之を望めば宛然氷柱を列立するが如く、近く之を観れば、白龍の雨を駆して百雷の怒呼するに似たり（雌雄両瀑あり、以上を雄瀑とし、一丁許りを隔てて雌瀑あり。高さ十余丈、幅一丈余あり、飛流直下匹練懸るがごとし。）

第二　詩　歌

沈　堕　滝　　石川丈山

峰巒一派掛三長虹一　　乱溜散漫烟霧中

○白銀河波底出　白龍倒下碧雲宮
辣傑巖洒不測淵　驚湍急硤眼如レ眩
高源漲落飛二氷雪一　萬馬千雷吼澗川

同　堀木庵

飛流如レ雪又如レ虹　人骨清冷一望中
高直明々奇絶処　却疑素練落二天宮一
飛瀑落来沈墮淵　淵深巖嶮忽為眩
古今此処号二男女一　盟久千年山与レ川

天正中近衛龍山（前関白久前）公薩摩に左遷の時、当主大友宗麟を訪い、此に遊覧し給ひて詠み給ふ歌あり。

布引をはたちあまりを重ぬとも
麓になりぬ豊国の滝

第三　記　事

古蹟名寄にいう（前出分は省略）

又天正中大友義統此の瀑布を観るの事を記するものあり即ち撮要記にいう。

尾形郷有二霊滝一、名二陳堕滝一、我豊州瀑川多、其秀曰二魚回一、又曰二龍門一、曰二蛇生瀬一、独以二尾形陳堕一為レ最也、水経百歩、岸高十丈、大水翅一瀑、小水裂而十三陳列随、因得二陳堕之名矣、傍有二小河一、阻レ岸落、是曰二妻滝、二瀑相倚、大江皷波、浪湧峰鳴、其声勢風雷所レ不レ如也、来観者不二敢久立一、皆憚然二而退、寔是州中之絶観也、義統聞レ之、自二有智山一到二尾形一、路得二此一瀑、因題二一詠一。

誰従天上決二銀漢一、　陳堕十三濺二一岩一
近比人々口如レ唖、　只聴二雷霆一起二深潭一。
瀑流岩畔暫延佇、　都共二水声一属二一閑一
此是観音三昧院、　幾多遊子等閑看。

十二、県下にある雪舟の遺墨・遺品

天開図画楼記に「上公侯貴介より、下浮屠氏・工商の徒に至るまで、数点の残墨を求めんと欲して、而して来往踵を接し、鉄門限を以つて称せらる、亦、豈、誣ふべけんや、戸に入りて其の席次を窺ひ見るに、粉大図・画筆・左右に雑還し、幅の大なるもの、幅の小なるもの、絹の細なるもの、紙の素なるもの、既に画き出したるもの、未だ画き出さざるもの、巻起して棟に充ち、装潢して壁に掛け、斯の如くして則ち粉を呪ひ日を終へ、丹を研いて月に渉る云々」とあるので、当時は相当地元我が二豊の地にはその作品があつたものと思われる。然るに今日郷土関係のものとしては只々一つ鎮田の滝

が知られているのみで、確実に遺品として世に知らるるもののないのは甚だ残念なことである。故工藤覚次氏は遺品の豊後に少なき理由を次の如く書いてある。

周防山口の旧藩主毛利公爵家には雪舟筆頃の山水画巻を初め、数多の名墨を所蔵されて居らるるそうである。然るに少くとも六・七年間我が豊府に在留せし、雪舟の遺墨が何故に豊後に存して居らぬのであろうか、思うに豊後には天正の昔には大友宗麟の神社仏閣の破却もあつた。又その十四年には薩軍の来襲もあつて、数百年間殷賑を極めた豊府も一朝にして焦土と化し去つてしまい、到るところの神社仏閣も亦焼失された。

又文禄二年には連綿数百年の名家大友家の没落もあつた。その後府内の城主には、早川・福原・早川・竹中・日根野・大給などと頻繁の交迭もあり、その内大給子爵家の外は何れも転退・没落の災禍に遭遇したものも多かつた等はその遺品の存在して居らぬ一因であろうか。」と。①

それも一理由であろう。

豊陽志の序文を書いてある杵築藩の拓華臺眉の著「大分郡志」下巻所收の「繪画及関係書物等」の項中に、

山水図　雪舟筆　豊後大津屋所持

と書いてある。大津屋はむかし府内の旧家であつたが今はどうなつているか不明である。

日田岳林寺にも雪舟の仏画があると「日田文化」の創刊号②に出ている。又「三隈抄③」には日田市大鶴に雪舟の画幅と茶碗などがあると写真迄出してある。

佐伯の大日寺には雪舟筆の雪景山水図がある絹本で竪一尺一寸七分、横一尺八寸三分の小品で、いわゆる破墨山水で上部に水月老納月窓（月窓明潭か）の賛があると久多羅木氏はいつている。④

大分市万寿寺にも雪舟の無落款仏画、秋月の画幅等がある

又大分市安岡氏は雪舟の三幅対其の他を秘蔵され、菊川氏も所蔵されているとのことである。

其の他亀川緒林氏等々県下各所に点々として雪舟筆と称するものが散見されるがその真偽は知る由もない。

註①　大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書　才　輯

②　昭和三十一年五月三十一日、日田文化財調査委員会発行

③　千原豊太氏著大正十一年刊

④　昭和三十一年六月五日刊「新豊州」

十三、雪舟と仮山

雪舟は画聖として有名なるばかりでなく、その遺跡に造庭の多きにより、造園特にその仮山水の築造法に一新機軸を出していることを知られる。即ち雪舟の設計した庭園は従来のものと全然趣きを異にして、従前のものを土佐派もしくば四条派と見做すならば、雪舟設計の庭はまさに南画である。彼は纖麗にして巧緻に流れ、此れは豪放にして閑雅である。従つて美的と謂わんよりも寧ろ詩的である。雪舟のこの手法、その拠つて来る所の一つに、彼が接した我が豊山豊水の印象がないといい得るであろうか。

彼の設計した仮山水は其の規模は小さいが、其気魄は雄大で、その景致は宛然真の山水に接するが如き趣きがある。それは彼が嘗つてその足跡を印した九州・中国の各地に今尚往々その遺跡を見ることの出来るのは既に記した通りである。

古川古松軒がその西遊記に亀石坊の庭園に就いて書いてあるものは雪舟の築庭上の手法を窺うべきものであるから左に抄出すると。

僧雪舟、帰朝の後、此山に六年住居しきといふ所あり、画も残り、また自ら造りし庭あり、僻地ゆえに小石一つも取なほさずして、そのまゝにむかしの形かはらず、千一見せしに、楓樹なども大木となり、自然の石橋苔むし、幽邃閑寂感ずるに堪え、其人の気象も思ひ察せられぬ。」と。

この庭園は英彦山の一の嶽を背景に收め、巨岩奇石を利用し、天然と人工と相俟つて築かれたものであるので、規模の雄大なること恐らく他にこれに比ぶべきものはなゝと沼田氏は其の著に極言してある。尚、口碑には雪舟が豊後に居つた時、この地に来遊した際、当主の需に応じてこれを築いたものであるといい伝えている。①

註① 画聖雪舟

十四、良心と雪舟

沼田博士は其の著「画聖雪舟」中收録の天開図画楼記の欄外頭註に次の如く書いてある。

「この文の作者杏塢呆夫其の事跡を詳にせず、天開図画楼後記には洛東釈杏林公とあれば、五山中の儒僧であるかと思はれる。雪舟と同舟して南遊せしといふを見ると、応仁元年入唐せしものか、戊子入明記に、和泉丸客人衆の中に

良心といふものがあるが、恐らくは是が、尚研究を俟つのである。」

と。又笹川臨風博士の「日本繪画史」や「江戸以前日本繪画史」には次の如く書いてある。

「一体此杏塢呆夫良心といふ人は、どこの僧侶であつたか不明であるが、嘗て雪舟と同船して明に入つたのである。天与清啓の戍子入明記に和泉丸客人衆の中に禀蔵主口入とあつて、良心の名が見えているから同一人ではあるまいかとの説がある。しかし天与清啓の再度入明は戍子入明記に云へるが如く応仁二年の入明にかかり、妙増・紹本・眷洋・寿敬・桂庵・玄樹等を引具して、堂々として渡唐したのであつて、応仁元年に入明した雪舟とは別殊であつたやうに思はれる。若し杏塢良心が禀蔵主口入の良心と同一人であつたならば、和泉丸客人衆の中に等楊の名があつても至当であらうが、一向に見当らない。一体入明と云ふことは渡航した時のことをも云ひ、国都に入つたことも云つて定らないが、雪舟の入明は応仁元年であるから、天与清啓の船に便乗したのではあるまい。して見ると、天与清啓に従つた良心と杏塢良心とは別人であろう。雪舟の為に天開図画樓記を記述して其地の光景を叙し、画を求むるものの状況を見るが如くに写したところを見ると、同じく豊後に居住していた禅僧であつたろう。よしそれが五山の緇流であつたにしろ、此頃は雪舟も同様に大友氏の領地に留錫していたのであろう。」と。

十五、桂庵玄樹と万寿寺

桂庵玄樹は長門永福寺の僧で、応仁二年十内船の遣明士官として雪舟等と同時に入明し、そのまゝ留まること六年、蘇杭の間を遊歴して、親しく鉅儒に就いて宋学を学び、文明五年帰朝後は、豊筑、肥並びに薩摩にあつてこれを講じ、鎮西に於ける文運興隆に盡すところが多かつた。後ち東福・建仁南禅の諸寺に歴任した。① 既に記した如く玄樹の豊後在住はその師の居た萬寿寺であつて、かうした関係が雪舟の府内来住の一原因ともなつたのである。

① 註日華文化交流史

十六、了菴桂悟と雪舟

了菴桂悟は別号を鉢袋子といい、応永三十三年に生まれ、文明中、伊勢の安養寺に居り更に東福寺に移つた。後土御門

天皇に召されて法問を受け、天皇より了菴の二字を授けられた。①

永正九年八十六歳で入唐した。壬中入明記はこの時の日記である。永正十一年九月十五日に歳九十一で歿した。雪舟とは莫逆の親友で雪舟が画いた東福寺の図に桂悟の賛を題したものが今も東福寺に伝えられている。②

桂悟が周防の天開図画樓に屢ゝ雪舟を訪問したことは、その作になる天開図画樓後記によつてもうかがい知ることが出来る。

註① 南禅史

② 〃

十七、雪舟門人と郷土関係

1. 豊後での弟子

天開図画樓記によると彼の画樓を訪ねた人は相当多数であるから、その豊後在留中にも多くの入門者があつたことと思うが明らかでない。只ゝ門人等恕は豊後人であるから当時の入門者であると思われる。①日田の岳林寺中正授院の得主蔵主もその一人といわれている。②高弟宗淵も豊後時代の弟子の一人である。宗淵は相模の人、字は如水、その山水彩墨は咫尺千里の趣きがある。③

肥後の等悦が高彦敬の臨本に、雪舟がその求めに応じて題して与えた手署の末尾に文明六年甲午正月下澣、大明国明州天童水一座雪舟とあるより見れば、或いは文明六年我が豊府在留中の雪舟に私淑して居たのではあるまいか。④又文明八年三月二十八日坂本田中村に於いて雪舟より君臺観を授けられた越後法眼は正しく豊後在留中と思われる。⑤

註① 「画聖雪舟」其の他による。

② 大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書

③ 一九五六年八月号「歴史評論」

④⑤大分県史蹟名勝調査報告書

2. 雪舟門下の九州人

「画聖雪舟」中に所載されている門人中より九州人を摘出すれば左の通りである。

等悦　肥後の人、文明頃の雪舟門下

等観　秋月と号し薩摩の人で雪舟の高弟

等禅　肥前松浦の人、松浦甫雪と号す。雪舟を師としよくその画風あり。

等歳　九州人、高野山に住む。

等梅　筑後の人、高野山に住む。能く戴笠鐘馗の図を画く。

等秀　薩摩侯の臣、淡彩の架鷹を画く。

雪山　広波氏、肥前の人、墨画の梅竹及び文珠持劔像を画く。一に雪村の門人ともいう。享禄頃の人

楊月　薩摩の人、山城・笠置に居て笠置楊月と称せらる。周天・雪舟を師として墨繪は牧溪に学ぶ。山水・人物・花鳥を画く。筆法は粗であつたが柔潤の態ありと称せられる。

周林　孤月と号す。薩摩の人、束帯天神像を画く。

資鵬　九州の人、雪舟の風格あり、筆力甚だ活動す。

永海　漲川氏。九州の人、筆意雪舟に学ぶ、天和中の人

註　「画聖雪舟」より摘出

3. 秋月とその門下

秋月は名を等観といい、本姓は高城氏、代々薩摩の島津氏に仕えた。壮年の時国を出て周防に赴き、雪舟に従つて其の弟子となり、出家して禅を修め、傍わら画を雪舟に学んで、遂いにその蘊奥を極めた。後、雪舟に従つて入唐し、ますますその技を研いた。秋月の落款に入唐の二字を冠するのはこの故である。最も師の筆意を得て居つたので、秋月の画で落款のないのは世人が往々これは雪舟と誤認したのである。秋月の帰朝した年代は詳かでないが、秋月の画の落款に在唐三年と書くことから考えて見ると、雪舟と同じく、文明二年に帰朝したものと思われる。秋月が雪舟に従学していた年代も明らかでないが、入唐以前即ち雪舟が、最初山口に居つた頃であると思われるが、雪舟帰朝後も亦従遊して山口に居たことがその詩文等より想像される。

山口に居た秋月は明応元年に至り、其の郷里の鹿児島に帰えり、福昌寺の住職桂山和尚は秋月のために客舎を整えて歓待した。

秋月は雪舟と同じく詩画ともに卓絶して居たので、雪舟も深く秋月を愛し、嘗つて自己の画像を与えた程である。

秋月の子を等碩という。牧雲と号する。家学を受けて山水・花鳥・人物を能くし、父の業をついで同じく島津氏に仕えた。

当時島津氏は薩・日・隅三州の地を、その武威下に置き太平を楽しんで居た時代である。従つて文学・繪画等も流行し

たので秋月の門人には割合に名手を輩出した。その主なる者を挙げると、

等薩　弓削氏、波月と号す。大隅国分の人、秋月及び周徳を師とし、山水・花鳥・人物を能くす。元亀年間の人

等見　大隅の山伏の総職、十福坊という。秋月の高弟である。

等坡　大隅小根古なる園林寺の住僧である。永禄の頃の人

等芸　日向福島の人

等海　長富氏、大隅の人、天文頃の人

湛賢　日向の人、永正頃の人

梅雪　日向の人、永正頃の人

註　「画聖雪舟」其の他による。

十八、雪舟の署名鑑定上より見たる鎮田瀑

左記は「国華雪舟」特集号に、伊東卓治氏が「雪舟の書」の標題で書いてある一節の抜書である。

△　△

（前略）そこで年の若い方に目を向けると、文明八年六十歳の頃と推定される鎮田瀑図の署名は楷書で面白い。こゝの舟字は全く細身で、雪字も雨冠りがおほひかぶるやうである。大体雪舟は雨冠りの才一筆は軽くちいさく置いて才二筆を下げ、そして才三筆は才一筆との間が殆んどない位に持つて行く。これが晩年の傾向であるが、然しこの瀑の図のやうにその間隔があるのは珍らしい。だからこれらは六十才頃の特長か。してみると団扇形倣李塘夏圭画の署名、或は博物館蔵墨梅図の落款と花押は雪字にこの傾向があり、舟字は四角形傾向であるから、これらは瀑布と長巻との中間形式でやゝ長巻の圏内にあるといへる。浅野家の育王山金山寺図はうつしであらうが、これに文明四年（五十三才）の署名が明風の楷書でかゝれてゐる。この雪字は雨冠りがおほひかゝるやうに重く、舟字が細身であることは、瀑図と共に一区劃にあることを示してゐる。すると五十から六十の頃の署名には大体このやうな特色があると見てよからう。してみると、雪字舟字の特色が年次的に変化があつたといふことになり面白いし、鑑定には好便である。すると博物館蔵、所謂夏冬山水図（実は秋と冬）の落款は、舟字が細身型を示して居るから何れにしてもこの細身型の期に当る。或はその後半にでも当

るか。すると鎮田瀑図以降、倣李唐画などの前につゞくものか。

扨て、金山図の署名は、雪舟が明から帰朝のとき贈られた明人徐璉希賢の瀑蹟に似て、明風に色どられた元代風に近い楷書であるが、瀑図では、それが手足を伸してきて和風化が見られる。すると、在明に近い程、明的であるといふ一般定則に当るか。してみると五十才で帰朝した後の真跡が残つているとしたら、定則通り明風に近いものが含まれてゐる筈とすると、現存附托の雪舟画批判に尠くともその署名に対する批判の尺度ともなるであらう。（中略）明に在つては相当の影響を受け、元の正当派的書風を嗣ぐものゝ風を得たと推定。そして帰朝後も暫くはこの風を和様化しながらも持続したことは鎮田瀑図によつて考えられる。そしてこの当時迄は細身の書風であるが、やがて拮屈なる筆法が雪舟画法と共に成長して、はげしく荒いものになる。そして元風から自己流がむき出しに出る。（後略）

十九、雪舟の山水小巻と豐後日出藩主木下俊長

「国華七百号記念、雪舟特集号」に藤懸静也氏が「山水小巻」の標題で左の通り書いてある。郷土関係の記事で面白いので原文のまま転載する。

△　△

本画巻は毛利家の山水長巻に対して、山水小巻と称せられるが、夙に丹青若木集には、この二巻を大軸小軸と書いてゐる。而してこの画巻が世に名高くなつたのは、長谷川等伯がこれを愛蔵し、家宝として、雪舟派に対抗し、雪舟派の正系たることを強く主張したからである。

そも〳〵この画巻は、雪舟が文明六年に門人等悦に与へたものである。そのことは次の奥書によつて知られる。

予嘗南遊、看中朝名手画、以彦敬為師者多矣。爾来予亦従一時之好、凡画山水則為効顰于彦敬、吾徒等悦求画本仍此与之、呉興夏氏士良曰高彦敬筆意作者鮮及、悦其勤哉

文明六年甲午甲午正月

下浣大明々州天童第一座雪舟

これによつてみれば、雪舟が明に遊んだ時、当時の名手の画は高彦敬を師とするものが多かつた。爾来雪舟も亦時流の好に従つて、山水を画けば彦敬の風を学んだ。門人の等悦が画。本を求めたので、即ちその画風を写して与へた呉興の夏

氏士良のいふには、高彦敬の筆意をなすもの及ぶもの鮮し、等悦それ勤めよやと、激励したのである。さればこの画巻の筆致は、雪舟が高彦敬の描法として画いたものである。従つてこれまた他の雪舟の作とその筆意を異にするのである。高彦敬とは元代の人で、高克恭といひ字を彦敬と称し房山と号したのである。山水は初め二米を学び後李成董源巨然の法を用ひ、造詣精絶といはれ、当時第一の名声を博したのである。而してこの人は雪舟の入明時に於てもなほ声価をおとさなかつたものとみえる。以て雪舟が古人の研究に犀利な眼を放つてゐたことを知るのである。さればこの画巻は雪舟の画風研究の上に貴重な資料となるものである。

然て今に伝へられてゐる画巻は、その前半が雪舟の真蹟で本号に掲出したのがそれであり、後半は長谷川某の模写であることを注意しなければならぬ。この巻に就いては伝ふべき挿話がある。それはこの画巻の末に附せられた由来書によつて知られるのである。

曩に述べたやうにこの画巻は、等伯が雪舟派の正系たることを主張する最も重要なる資料であり宝であつたが、如何なる事情かは明でないが、いたく窮迫して遂にこの宝物を手放したのである。そのことが由来書に記されてゐる。その筆者は豊後国日出藩主木下俊長である。俊長は日出藩三世の城主で、由来書にみる延俊の孫である。その文意は次の如くである。

木下延俊が一日細川三斎翁の亭に会した時、偶々長谷川某なるもの、この一巻を携へ来つて、貧窮と暮年とに迫られ家伝の画本ではあるが、ひさいで一時の急をのがれたい、と。三斎翁これを展べて熟覧するに、巻となすには甚だ短いから切つて壁にかけるがよいとて、その前半を延俊の有とし、後半を三斎翁の蔵とした。されば木下氏は長谷川某に命じて、後半の図と跋の書とを写さしめ、これを真筆に添えたのである。これでこの画巻が真蹟と模本とを混じてゐる由来を知ることができる。而して細川家所蔵のものは不幸にして明暦三年の大火で焼失したのである。

かやうにこの両巻の由来は記録によつて明かにされたが、いつ両分されたのか、その時期は不明である。然しその文中に三斎翁と記してゐるから、忠興老後のことであらう。また長谷川某とあるのは誰を指すのであらうか。等伯は慶長十五年に死んだのであるから、この時忠興は未だ四十七歳である

然らば翁とは書かないであらう。更に後のことで、等伯死後のことであらう。然らばこの画巻を手放したのは、等伯の後継者で長谷川家の画人と考えられる。模本の部が雪舟の筆とは違ひ見劣りするのは、等伯のやうな達人の手によつて写されたものでないことが考へられる。然し模本が作られ跋文が写されてゐるので、前半の真蹟に添へて画巻の全貌を知ることのできるのは、貴い資料である。

註　本山水小巻は四季のうつりかわりをおりこんだ、あざやかな、色調を用いたもので現所有者は反町茂作氏である。

あとがき

雪舟の四百五十年を迎え、由縁の地大分県人として、雪舟との郷土関係を再認識することは必ずしも徒事であるまいと思ひ筆を取つたが、何分にも短時日で充分なる研究の出来なかつたことを遺憾とする。笹川種郎博士著江戸以前日本繪画史中に「そのうちに大内氏若しくは大友氏の船に便乗したのでもあろうか、遂に入明することになつたのである。」などとあることも究明する必要はないだろうか。杜撰な本研究が読者各位の他山の石となり、地方史研究の一助ともなることが出来れば筆者望外の幸である。

引用と参考文献

沼田頼輔　画聖雪舟　斉藤玉英堂　明四五・二・一〇刊
笹川臨風　日本絵画史上巻　玄黄社　大十一・一〇・一〇
笹川種郎　江戸以前日本絵画史　創元社　昭一八・二・二〇
国華社百七号記念　雪舟特集号　国華社　昭二五・七・一
岩波写真文庫　雪舟　岩波書店　一九五六・九・二五
角川写真文庫　雪舟　角川書店　昭三一・四・二〇
熊谷宜夫　日本の名画　雪舟　平凡社　一九五六・一〇・一五
高安三郎　日本文芸復興史　日本稲田大学出版部　昭四・六・一〇
兼松亀吉郎　世界美術全集一七　平凡社　昭二・十一・一
重森三玲　日本西洋庭園史　東陽堂　明三八・一・二八
森蘊　日本の庭園芸術　富書店　昭二一・八・一五
桓本吉雄　日本庭園の伝統　一条書房　昭一九・三・一〇
大分県　大分県郷土史料集成地誌編　其刊行会　昭一五・六・二〇
森春樹　豊国小志　甲斐治平　明四〇・一〇・一〇
鈴木泰山　造領記　日田高等学校
大分市　禅宗の地方発展　畝傍書房　昭一七・一・二〇
木宮泰彦　大分市史(上巻)　大分市役所　昭三〇・三・二五
辻善之助　日華文化交流史　富山房　昭三〇・七・二〇
藤田元春　「増訂」海外交通史論　内外書籍株式会社　昭五・五・一五
秋山謙蔵　日支交通史の研究(中近世篇)　富山房　昭一三・四・一二
田中義成　日明関係　岩波書店
楢崎宗重　足利時代　明治書院　大一二・四・五
山口県　美術と史学　有光社　昭一八・七・二五
山口県文化史年表　山口県　昭三一・四・一

以下紙面の都合上省略